

2. 日本書紀成立の経緯と藤原氏の存在

2.1 国史撰集の詔勅

日本最初の歴史書「日本書紀」は天武10年(681)国史撰集の詔勅で修史事業が始められた。次いで、持統5年(690)の勅で豪族18氏の「墓記」の提出が有り原資料が追加され、更に元明天皇の勅(714)で二人が撰述に加わり、養老4年(720)に舎人親王から元正天皇に提出された。内容は、巻1,2の神代紀に始まり、巻3神武紀から巻30持統紀までの計30巻である。系図1巻は伝わっていない。文体は漢文である。

修史事業の始まる前の大和朝は、未だ大王を中心とする豪族たちの協議政体であり中央集権国家を目指して、様々な努力が重ねられている最中であった。

その中に蘇我宗家が存在し、大王継承にも強い発言権を發揮していたが、それを良しとしない皇太子の中大兄皇子が藤原鎌足の入力智慧で、宮中行事の際に、実力者蘇我入鹿に斬りつける事件が起きた。(乙巳の変 645年)

このため時の天皇皇極が退位し弟の軽皇子が即位(孝徳天皇)した。9年後孝徳が没し皇極が二度目の皇位(斉明天皇)に即く。

その斉明は朝鮮半島の戦乱に苦しむ百済を支援しようとして九州に赴いたが旅先で急死する(662)。皇太子中大兄皇子は服喪と称して一旦近畿に引き揚げる。

翌年(663)白村江の戦いで、筑紫朝の戦力が壊滅したが、大和朝はほぼ無傷で済んでいた(翌年2月大和では盛大な祝賀行事があったことから判断される)。

戦後、唐の軍隊が筑紫に入り、財物没収、防護施設破壊などを遂げた後、大和朝がこの地を支配下に置いた。(唐軍の駐在は671年まで続いたので、大和朝が実質支配したのは、壬申の乱(672)以降である)。

中大兄皇子は都を飛鳥から近江に遷し天智朝を開いた。天智10年(671)天智が病没する。一旦出家して吉野に引退していた弟の大海人皇子が、近江の政府を継いだ大友皇子(天智の子)を襲い、大友皇子を自死させる。(壬申の乱 672年)

(明治時代になって、大友は弘文天皇として皇統に追記された)

都を飛鳥に戻し、皇位に即いた大海人皇子(天武天皇)は指導力を發揮して強力な政治を敷く。その上で中央集権国家を目指し、律令制定の詔勅、国史撰集の詔勅を相次いで出した。国史には自身が武力で皇位を奪ったことを正当化しておく必要もあった。

2.2 持統天皇と藤原不比等

天武天皇にはその子らに大津皇子、高市皇子など有能な後継候補者がいたが、皇后持統は自身の子の草壁皇子への継承を強く願っていた。

一方、前代の天智に仕えた藤原鎌足の子の不比等は、天武が元気旺盛な時代には全く不遇であったが、天武が病弱になると、皇后の持統に近づき様々な提言をする。

天武病没(686)直後、大津は謀反の疑いで自死させられ、持統が皇位に即く。高市を左大臣として

しのいだ

その後 期待の草壁が病死したため その子(14才)を即位(文武天皇)させる 文武も病弱で退位を希望したため 文武の母親が即位(元明天皇)し 当人も途中で退位を希望して その子(文武の姉)を即位(元正天皇)させ やがて成人した文武の子(23才)が皇位に即く(聖武天皇)

この間 女性天皇(持統、元明、元正)と年少の天皇(文武、聖武)が続いており 藤原不比等が外戚(不比等の娘 宮子を文武の妃に入れていた)として権力を振るうことになる

従来 廟儀に参加するのは各豪族から 1人だったが 不比等は我が子の武智麻呂、房前、宇合、麿呂の 4人を参議として参加させた

且て 有力だった 蘇我、物部、大伴、葛城などの豪族は力を失っており 今まで全く無名だった藤原が絶対的権力を振るうようになったのである

(天武期に公地公民化を進め 豪族の土地を徐々に削っており力の真空状態が生じていた そして大和朝伝統の合議制が藤原氏によって破壊されていたのである)

編集作業の進んでいた日本書紀も 不比等の意向を受けて様々な形で改竄が行われた 又 高齢の不比等の死期が迫るに及んで完成を急がせたので 編纂上の齟齬も多く生じている(記事の重複、期日の誤りなど 意図的でないものも含む)

720年 日本書紀の提出を見届けて 不比等は没した

改ざんの事例を挙げてみる

- ア. 大和朝に先立って律令制を確立していた筑紫朝の存在を隠すため 九州がらみの文書を徹底して没収し処分した(元明天皇詔勅 707年 708年、元正天皇詔勅 717年参照) (いずれも 武器や禁書を隠匿することを禁じている)
- イ. 神代紀に関する原資料は大部分が筑紫朝の文書(日本紀など)であったため これらの文書名を伏せて記載し 又一部で「一書に曰く」として異論も併せて多くの事例を記載した
- ウ. 景行天皇の九州討伐などは筑紫朝の日本紀の記事を 大和朝天皇名景行に置き換えて取り込んでいる (又 雄略天皇の遺勅は 唐の高祖の遺勅そっくりである)
- エ. 神功皇后の新羅征伐、高句麗・百濟帰属の記事は 事実無根の記事である (時代としては 卑弥呼の時代に相当するが この時代に新羅・百濟は存在しなかった)
- オ. 史上全く無名の藤原氏を称揚するため 不比等は手の込んだ策を講じた
先ず 高德の聖人聖徳太子(彼は律令の基本の位階を明らかにし、又 憲法を定めて君臣の秩序を明らかにすると共に仏法を敬し和による政治を実践した)を創り出し その子の山背大兄王を殺害した蘇我入鹿を大悪人に仕立てた (厩戸皇子と同年代の筑紫朝の多利思北孤の事績が聖人に相当するので転用したのかも?)
その悪人入鹿を斬った天智は天の命を受けた“受命の天子”であり そしてそれを支えた藤原鎌足の功績が極めて大であるとした
- カ. 日本書紀編纂の初期には 天武を“先帝”として扱っていたが 途中から 天智を先帝とするよう方針転換された
- キ. 大和朝が実際に律令制を施行したのは大宝律令(701年)からであるが 乙巳の変後「改新の詔」(645)で律令制を施行した と記述した

(明治期になって これを“大化の改新”と呼んだが 後に出土した木簡で事実無根と判明した)

2.3 古事記

同時代の歴史書に古事記が有り その序文によれば 天武天皇が^{ひえだのあれ}稗田阿礼に 諸家に伝わる

「帝紀」「旧辞」の誦習を命じ 後に元明天皇が太安万侶にその作業の継続と撰録を命じた

安万侶はそれを 3巻にまとめて 和銅5年(712) 元明天皇に献じたとされている

上巻は神話と伝説、中巻は初代神武から15代応神天皇まで、下巻は仁徳から33代推古天皇までとなっている 文体は“倭化漢文”で漢字の配列を日本語の語順に変え 音読み訓読みを交えている

現存する最古の写本は真福寺本(1370)で 長年無視されて来たが 国学者本居宣長に再発見され称揚されてから注目されている

全巻を通じて歌謡が多く紹介されていて 上代仮名遣いなど言葉の研究に非常に有用なばかりでなく 思想や宗教の研究にも重要であり 又 文学でも優れていると評価されている

しかし 安万侶の序文では 天武天皇を称揚しており 当時不比等らが仕切っていた朝廷ではその文面は到底見過ごされなかったであろうこと 又 万葉集より仮名遣いが整っていて 後代のものと見做されることから 偽書説も出されている

大和岩男が「太安万侶の子孫の^{おおのひとなが}多人長が密かに作成し 9世紀に そつと世に出した」と唱えて

いるので 本日はこの大和岩男説を採用したい (多人長「弘仁私記」823年参照)

(多人長は 日本書紀講義録の中に “古事記”“太安万侶”の文字を書き入れている)

尚 天皇家にまつわる記事は 21代雄略で止めてしまい (23代24代でごく僅かな記事) それ以降は系図のみである

当時の朝鮮半島との交流を含む国際情勢や 仏教伝来などの記事が全く無い (古事記は歴史書として役立たない)

日本書紀の記述のあざとさに気づいて 多人長 (当時の朝廷で日本書紀講読会の講師を勤めていた) が 直近の記述を控えたものと思われる (日本書紀の記述との激突を避けた)